

学習者の特性に応じたグルーピング方法の検討

— 大学生の運動有能感得点を特性として —

元 塚 敏 彦

キーワード：グルーピング グループ チーム 運動有能感 個人的種目
集団的種目

I 緒 言

1 学校教育に求められる説明責任と体育授業

地域社会の人間関係の希薄化、少子化、遊びの変質、受験競争などの影響が重なって、子ども同士の豊かな交流がなくなり、学級崩壊、いじめ、登校拒否、残忍な暴力事件など子どもたちに大きな問題が生じている¹⁾。このような問題に対して学校教育は何ができるのか、厳しく説明責任が問われている。体育科の学習は、学習対象である運動やスポーツが協力や競争において仲間の存在が不可欠であることや、学習成果が仲間によって容易に判定されるということから、ペアーやグループによる学習機会の多いことが特徴である。

ペアーやグループでの学習には、仲間同士の交流が不可欠であり、協力的な活動が求められる。また、集団が目標に向かうためには、所属するメンバーが目標達成に向けた集団を維持する方法、集団内の相互の関わり方、計画の立て方などを理解していることが求められる。さらにメンバーは、その集団の一員として活動することによってそれらの方法を身につけることができ、結果だけが重視される現実の中に、努力する過程に価値を見出すことができる。このような体育科の特徴から、先の子どもたちの問題に対して大きな効果が期待されている。

2 体育科の説明責任と集団学習の効果的な進め方

しかし、このような特徴を持つ体育の授業をすれば直ちに子どもたちの問題が解決するのではないことは明白である。集団学習の実態について、形態的な集団に終わってしまい、集団での学び合いが十分に行われず、集団の機能が十分発揮されていない授業や、課題解決につながらない無意味な言語や否定的な言語も多く、互いの人間関係を険悪なものにしてしまう授業も少なくないことが報告されている²⁾。また、体育授業における集団学習による人格形成や社会的規範意識の獲得などの成果は、集団で学習を行えば必ずすべての子どもが獲得できるものではないことから、体育授業のもつ集団学習の効果がすべての子どものもものとなるよう、肯定的で適切な指導助言のできる賢い集団づくりがめざされるべきであり、マナーの学習、運動技術や戦術についての知識、合理的な学習の仕方、運動を見る目を育てるなど、「わかる」ことをテーマとする授業づくりが必要であるとされている³⁾。

このように体育科が子どもたちの今日的課題の解決に向けて貢献するためには、集団学習を効果的に進める方法の開発が必要であるといえる。

3 集団学習と子どもの実態

子どもたちの今日的課題の解決に向けて集団学習を効果的に進める必要がある。しかし、少子化や核家族化の進行、小型ゲーム機や携帯電話の浸透、インターネットの普及などの影響により、子どもたちにとって集団学習の基礎となる人間関係の構築が年々難しいものとなっている⁴⁾。

このような子どもの実態は、体育科の改善の基本方針に「体を動かすことが身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現を通じてコミュニケーション能力を育成することや・・・」⁵⁾とあることや、「仲間との交流」の必要性から平成10年改訂学習指導要領の5・6年生に「体づくり運動」領域の内容として「体ほぐしの運動」が示されたことからも理解できる。

4 体育授業における集団学習に関する研究

しかし、これまでの体育科における集団学習に関する研究や実践報告は、集団学習で何を学ぶのかという学習目標論的研究や集団をどのように活用するかという手段論的研究であり、具体的な集団学習の進め方は問題にされてこなかった⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。また、教育学の分野においても同様に全体学習とグループ学習の比較として、グループの人数、期間、グループ内やグループ間の能力差の問題などが方法論的に扱われている¹²⁾が、グループをどのようにつくるかというグルーピングに関する具体的な説明が行われてこなかったといえる。

5 グルーピングに関する実践報告例

グループを編成して行われた実践報告を最近10年間（2000年1月～2009年8月）の月間雑誌「体育科教育」116冊に求めた。実践報告はそれぞれの実践課題や研究課題に対する報告であることから、グルーピングに関する記述が省略されているものと推察されるが、グループをどのように編成したかというグルーピング方法の記述は、139例中13例に見られただけであった。

以上のような集団学習に必要な人間関係に関わった経験がなく集団による学習が苦手で負担に感じる傾向にある子どもたちの実態から、集団による学習の進め方に関する研究が必要であると考えられる。

筆者はこれまで集団学習を効果的に進める具体的方法の一つとして授業の最初に行われ、授業の進行を大きく左右し、集団学習における教育的効果の発揮にも大きな影響を及ぼすグルーピング¹³⁾方法について注目し、グループ編成の実態や指導者の考え方を報告し¹⁴⁾、さらに、学年別のグルーピング方法¹⁵⁾、運動領域別のグルーピング方法¹⁶⁾について報告してきた。

しかし、これらの報告は指導者へのアンケートによるものであり、子どもへのアンケートによるグルーピング方法と授業評価の関係や子ども個々の特性からみたグルーピング方法の検討などを今後の課題としてきた。

そこで、本研究では課題の1つであった学習者の特性を考慮したグルーピング方法について大学生を対象に検討することにした。

筆者のこれまでのグルーピング方法に関する研究の流れからすれば、小学生を対象に検討を進めるべきところであるが、小学生にはグルーピング方法の違いや集団の種目、個人的種目などが理解されにくいと判断したこと、また、指導者がグルーピングをクラスの実態から決定している場合、グルーピング方法を選択するというアンケート調査は、今後対象クラスにどのような影響をもたらすかという危惧もあり大学生を対象として学習者の特性を考慮したグルーピング方法を検討することにした。

学習者の特性について、筆者はすでに学年別にみたグルーピング方法の検討を行っているが、それは同一の授業を受ける子ども全体の特性であり、個々の特性ではなかった。そこで本研究では集団学習場面や運動学習場面に係わる個人の特性をこれまでの体育学習経験の結果、形成された運動に関する自信と捉え、その程度を運動有能感得点から求め、その得点の高低から学習者を3群の特性群に分け、各特性群別にグルーピング方法とその期待度得点の関係から、学習者の特性に応じたグルーピング方法を検討することにした。

II 目 的

運動有能感得点の高低による学習者の特性に応じたグルーピング方法を検討する。

III 方 法

1 アンケート調査の実施

(1) アンケートの作成

ア 学習者の特性を求めるアンケート

学習者の運動・スポーツの学習に関する特性は、幼年期から積み重ねられた遊び体験、身体の発育・発達、運動学習の経験、運動・スポーツへの動機づけ、運動に対する態度とパーソナリティー、運動種目の好み、運動技能の習熟過程などの質や量の違いからみることができ¹⁷⁾¹⁸⁾。また、グループなど集団による学習に関係する特性としては、子どもの自己や他者の捉え方、集団への所属、仲間関係への意識などの違いとしてみることもできる¹⁹⁾。このような学習者の

特性の多様性は、学習者がある特定の観点で特性づけることの困難さを示すものでもある。そのため本研究では学習者を特定の観点から捉えるのではなく、総合的な捉え方によって特性づけることにした。運動の楽しさや喜びに触れ、運動に親しむ資質や能力を育て、生涯スポーツを目指すことが保健体育科や体育科の目標とされ、運動・スポーツにおける楽しい経験から子どもたちの運動・スポーツへの動機づけとなる自信を高める体育授業が求められている。そこで、本研究ではこのような考え方による授業によって学習者が身に付けてきた運動・スポーツに関する自信の程度を学習者の特性とした。この運動・スポーツの自信の程度は、岡澤らによって作成された運動有能感測定尺度（注1）²⁰⁾によって測定できることから、その尺度内容を学習者の特性を問うアンケート内容とした。（資料1 運動有能感を問うアンケート）

イ 運動有能感と性差

運動有能感得点は、女性より男性の方が高い得点を示す傾向にあることが明らかにされている²¹⁾。そこで本研究では学習者の特性に男女差の影響を避けるため、運動有能感尺度を問うアンケートに性別を問うアンケートを加えた。

ウ 学習者の期待するグルーピング方法を求めるアンケート

グループの大きさやグループの固定期間、グループ編成の基本的考え方、グループによる学習の進め方や課題などを提示する文献は多くみられるが、グルーピング方法を提示する文献は少なく、グルーピング方法を示す実践報告も少ない²²⁾。このような状況下において大橋は表1の「グルーピング編成の具体的方法」²³⁾を示している。また、D.Siedentopはスポーツ教育モデルの実践におけるグルーピング方法の課題を人数と編成方法であると述べ、教師たちの経験や意見から表4のような編成方法を示している²⁴⁾。これらの方法は教師中心から教師と子どもによる方法、さらに子どもたちにグループ編成の責任を持たせた子どもたち自身による方法が順に示されている。このように大橋が示した編成方法の他にグループ編成方法は見当たらなかったこと、また、その方法がD.Siedentopの示す編成方法とも類似していることから、表1に示す大橋の編成

方法をグルーピング方法の典型例であると考え、グルーピング方法の期待度を問うアンケート内容として採用した。

大橋はグルーピング方法を示すと同時にグルーピング方法「1」～「5」について採用時の留意事項を示している²⁵⁾。表2は大橋による留意事項を「1」～「5」の順に筆者が再構成したものである。

表1 グルーピング編成の具体的方法

- 「1」 グループとリーダーを教師が決める。
- 「2」 リーダーを教師が選び、リーダーが話し合ってグループを決める。
- 「3」 教師がグループ分けをして、そのグループでリーダーを決める。
- 「4」 リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合ってグループを決める。
- 「5」 グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める。

表2 グルーピング方法の特徴と編成時の留意事項

< 「1」, 「2」の方法について >

グループ編成にかかる時間を短縮する場合や、クラス経営を考える場合は、教師があらかじめ決めた内容を提示する方法である「1」, 「2」の採用も考えられるが、できれば避けたい方法であると示されている。

< 「3」の方法について >

「5」の方法による心配から、教師が子どもたちをよく知っていればよい方法であると示されている。

< 「4」の方法について >

子どもたちのことは子どもたちが一番知っているという立場に立てば、この方法が一番よいと示されている。さらにグループ編成のためのリーダーは仮のリーダーであり、グループ決定後にグループ内で再度リーダーを決定するとなおよいと示されている。

しかし、この場合もみんなの前で仮のリーダーによるグループ編成は避けるべきであること、教師の指導のもとに編成を行わせるべきであることが留意事項として示されている。

< 「5」の方法について >

この方法はクラス全員で決めることから一見民主的のようであるが、実はみ

んなの前で、上手い子、下手な子などの評価が行われることになり、あまりよい方法ではないと示されている。このように考えるとこの方法は厳しい方法であり、下手な子どもはこの方法を避けたいのではないかと思われる。

(大橋の留意事項を参考に筆者作成)

表1の「グルーピング編成の具体的方法」の特徴と編成時の留意事項を表2に示したが、本研究ではこのような特徴の捉え方に加えて、グルーピング時の主導性、つまり誰がグループを編成するのか、リーダーを誰が決めるのか明らかにするために表3を作成した。

表3から「1」は指導者の主導性の最も強い方法であり、「5」は学習者の主導性の強い方法、「3」がそれらの中間、「2」と「4」はリーダーがグループを決定する方法であるが、リーダーを指導者が選ぶのか、学習者が選ぶのかに違いがあり、リーダーの選出方法を加えると「2」は「4」より指導者の主導性の強い方法であることがわかる。

以上から表1に示されるグルーピング方法はグルーピング時の指導者と学習者の主導性の違いを特徴としているといえる。

表3 グルーピング方法におけるグループとリーダーの決定者

	1	2	3	4	5
グループの決定	指導者	リーダー * 1	指導者	リーダー * 2	学習者
リーダーの決定	指導者	指導者	学習者	学習者	学習者

* 1：指導者が選んだリーダー * 2：学習者が選んだリーダー

表4 スポーツ教育実践モデルに示されるグループ編成方法²⁶⁾

- 1 子どもたちの技能、態度、出席などのデータから教師がグループを編成する。
- 2 スポーツ委員会の委員を教師が選び（あるいは子どもたちの選挙で選ぶこともある）、この委員会と教師が共同でグループを決定する。
- 3 グループのキャプテンを教師が選ぶか、立候補者を立てて選挙で選ばせる。その後教師とキャプテンが協力してグループを決定する。最後にキャプテンの所属を抽選で決める。

- 4 子どもたちがスポーツ委員会の委員を選び、委員がクラスメンバーの技能や知識レベルからグループを編成する。
- 5 スキルテスト、試しの試合、梯子式順位決定試合などをメンバーのランク付けに用い、これにもとづいてグループを編成する。

エ グルーピング方法と運動の特性

(ア) 体育授業における集団構成の形

体育授業における集団はグループ編成が行われる場面やグループをつくる目的、グループのメンバーが固定される期間から表5に示すように3つの形に整理できる²⁷⁾。これらの中で子どもたちが集団の一員として活動することによって今日的な諸問題を解決できる集団は、③に示したグループやチームと呼ばれる長期的、固定的な集団を組織する集団である。筆者はこのグループやチームを編成するためのグルーピング方法のあり方を研究対象としてきた。

表5 体育授業における集団構成の形

- ①即興的集団：指導者の指示に従って構成され、その運動を行う時だけの集団。
例えば馬跳びを行うために整列隊形を利用した隣同士のペアなど。
- ②課題別集団：学習課題別に構成される集団。「めあて学習」などのように「めあて1」から「めあて2」に課題が変われば同一授業内でも集団構成が変わる。また、鉄棒などでは、体格や鉄棒の数などからこのような集団が構成されることもある。
- ③長期的・固定的集団：単元の始めにチーム（グループ）を固定し、単元を通して同じメンバーで構成される集団。ボール運動領域のサッカーやバスケットボールなどでは、それぞれのグループが自分たちの課題をもち、学習内容や方法を自分たちで決定し、課題を解決する。また、器械運動においても技能レベルの異なるメンバーで構成される異質集団が構成され、共通課題や個々の課題をグループで解決する授業が展開されることもある。

(イ) 運動領域の分類と集団学習

1977年改定の中学校学習指導要領（保健体育編）²⁸⁾では運動領域をA－体操、B－個人的スポーツ（陸上競技、器械運動、水泳）、C－集団のスポーツ（バスケットボール、バレーボール、サッカー）、D－格技、E－ダンスに分類している。

この分類から一般的には授業においてチームやグループによる学習が行われるのは、C－集団のスポーツであると考えられる。しかし、現行小学校学習指導要領解説（体育編）²⁹⁾では器械運動や水泳の領域に集団演技が示されている。また、陸上運動にチームで競争するリレーが示されている。このように、個人的スポーツに分類される種目の授業においても長期的、固定的なチームやグループの編成が必要とされることがある。

表6は、上記の種目分類に従って、現行小学校学習指導要領解説を参考に集団学習に関わる集団的スポーツと個人的スポーツの特徴をまとめたものである³⁰⁾。表6にみられるように集団的スポーツと個人的スポーツでは、楽しみ方や学習の進め方、学習成果の表れ方、集団内における個の存在（個人的スポーツの集団演技では、集団は個の集まりで、集団の中に個がそれぞれ存在し、集団の学習成果は、個の学習成果を集めたものとなる。一方、集団的スポーツでは集まった個は集団内に取り込まれ、その時点で個でなくなり、集団の学習成果のみが評価の対象となる）などの違いがみられる。

このような違いから授業で取り扱う運動種目によって子どもたちの集団の捉え方や、集団と子ども一人一人の関係、集団内の子ども相互の関係などが異なり、その違いを配慮した授業方法の工夫が求められる。特に集団を構成するグルーピング時には運動種目による集団の意味の違いを十分に配慮する必要があることから、本研究では学習者の期待するグルーピング方法を問うアンケートを資料2に示すように個人的種目と集団的種目に分けて回答を求めた。被験者には個人的種目と集団的種目別に回答を依頼した。個人的種目と集団的種目に関する説明をアンケート用紙に示し、さらにアンケート実施時にも口頭で説明した。

表6 集団学習に関わる集団的スポーツと個人的スポーツの特徴

	集団的スポーツ (球技などの団体種目やリレーなど)	個人的スポーツ (器械運動や陸上競技などの個人的種目)
集団の 競い合い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団対集団の競争を楽しむ. ・ 個人の学習成果が集団の学習成果として再構成され、個の結果が消滅し、新たな個（集団）として競い合いを楽しむ. 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個々の競争や個々の学習成果の合計で競争する. ・ 個の集まりであり、個が集まって再構成され、新たな個にならない. ・ 個の結果を集めて集団を構成し競争を楽しむ.
学習の仕方	共通の目標に向かって全員が学習する.	<ul style="list-style-type: none"> ・ 共通の目標を分割して、成員が分担する場合もあるが、それぞれが共通の目標に向かった目標をもって活動する. ・ 個々の課題に対して協力して取り組む、一時的に全員が共通の目標に向かって活動することもある.
学習成果の 確認	学習過程も評価されるが、集団対集団の競争による確認が中心となる.	個人の記録や達成度が評価される.
個人と集団の 関係	集団目標が優先され、集団のための個人（成員）となり、個人の目標は集団の目標の達成となる.	集団は、個人目標の達成のためにおこなわれる相互の協力のために機能する.

(2) 調査対象

三重県内K大学2回生 小学校教職科目「体育科教育法」受講生238名

(3) 調査時期

2011年10月25日 体育科教育法の授業中（「指導法略」に関する講義内容に関連付けて実施）

(4) 調査方法

授業中にアンケート用紙とマークカードを配付、回収した。配布後、個人的種目や集団的種目について説明を行った。配付・回収枚数は238枚であった。マークミス等分析不能回答が15枚あったため223名分の回答を分析対象とした。

2 アンケート結果の分析

(1) 学習者の特性

対象学生を男女に分け、運動有能感を問う質問の回答から運動有能感得点を求めた。次に男女別にそれぞれの得点の上位から1/3程度の人数を目安に上位群、中位群、下位群に分け、それらを学習者の特性群とした(表7)。このように決定した各群の運動有能感得点に対する各群の影響を分析するために各群を変数、運動有能感得点を従属変数とした一要因分散分析を行った。さらに分散分析の結果、各群の有能感得点への影響が有意に認められたので、どの群間に差があるかを調べるためにLSD法による多重比較を行った。その結果、表8に示すように男女とも各群間には優位な差があり、本研究で学習者の特性とした運動有能感得点の高低による学習者群は、運動有能感的に異なる特性を持った群であることが確認された。

表7 運動有能感得点による学習者の特性群分け結果

性別	区間と人数	上位群	中位群	下位群	合計
男	得点区間	59-46	45-39	38-17	101人
	人数(%)	32(31.7)	39(38.6)	30(29.7)	
女	得点区間	54-42	41-35	34-21	122人
	人数(%)	42(34.4)	42(34.4)	38(31.2)	

表8 学習者の特性群別平均値の分散分析結果

性別		上位群	中位群	下位群	1要因分散分析F値	多重比較LSD p<.05
男子	人数	32	39	30	166.013***	上位>下位, 中位 中位>下位
	平均得点	50.031	42.180	31.633		
	標準偏差	4.519	2.163	5.605		
女子	人数	42	42	38	352.549***	上位>下位, 中位 中位>下位
	平均得点	47.095	38.095	29.000		
	標準偏差	3.370	2.128	3.495		

***: p<.001

(2) グルーピング方法の期待度

本研究では表1に示すグルーピング方法に対して、以下に準備した順序尺度による回答群から選択し、マークカードへの回答を依頼した。

4 ぜひ、そうしてほしい	3 そうしてほしい	2 そうしてほしくない
1 ぜひ、やめてほしい		

次に本研究では、学習者の期待するグルーピング方法と学習者の特性の関係を統計的手法によって明らかにするために、得られた順序尺度による回答を簡便法により各グルーピング方法の採用を期待する程度の強さとし、期待の強さに応じて4点から1点までの間隔尺度に置き換え、期待度得点とした。

(3) グルーピング方法間における期待度得点の比較

学習者の特性と学習者の期待するグルーピング方法との関係を明らかにするために、学習者の特性群別にグルーピング方法を変数とし、各グルーピング方法別の期待度得点を従属変数として被験者内計画による分散分析を行った。分散分析の結果、グルーピング方法の期待度得点への影響が有意に認められた場合には、どのグルーピング方法間に差があるのかを調べるためにLSD法を用いた多重比較を行った。

(4) 統計処理方法

以上の統計処理には、SPSS for Windows Ver.16.0 familyを用いた。

3 学習者の特性に応じたグルーピング方法の検討

運動有能感得点の高低とグルーピング方法への期待度得点の関係から学習者の特性に応じたグルーピング方法を検討した。

Ⅳ 結果と考察

結果と考察については、表9に示すように、(1)男子の個人的種目で運動有能感得点上位群から(12)女子の集団的種目で運動有能感得点下位群までの分類に従って進めた。

表9 結果と考察一覧

性別	種目の特性	学習者の特性	グルーピング方法
男子	1 個人的種目	(1) 上位群	1 グループとリーダーを教師が決める。 2 リーダーを教師が選び、リーダーが話し合っ てグループを決める。 3 教師がグループ分けをして、そのグループで リーダーを決める。 4 リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し 合っ てグループを決める。 5 グループをクラス全員で決め、そのグループで リーダーを決める。
		(2) 中位群	
		(3) 下位群	
	2 集団的種目	(4) 上位群	
		(5) 中位群	
		(6) 下位群	
女子	3 個人的種目	(7) 上位群	
		(8) 中位群	
		(9) 下位群	
	4 集団的種目	(10) 上位群	
		(11) 中位群	
		(12) 下位群	

1-1 男子、個人的種目におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

男子、個人的種目における学習者の特性とグループ決定方法の関係を明らかにするために、運動有能感得点群(上・中・下位群)別にグルーピング方法の違いが期待度得点に与える影響について分散分析を行い、さらにグルーピング方法の影響が有意であった場合、どの決定方法間に差があるのかを明らかにするためにLSD法による多重比較を行ったところ、以下の結果が得られた(表10)。

(1) 運動有能感得点上位群におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

男子、個人的種目の上位群では、表10に示されるようにグルーピング方法の期待度得点への有意な影響がみられなかった ($F(2.763, 85.645) = .398, p = .739 > .05$).

(2) 運動有能感得点中位群におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

男子、個人的種目の中位群では、表10のように分散分析の結果、グルーピング方法の期待度得点に対する有意な効果がみられた ($F(4.000, 152.000) = 4.887, p = .001 < .05$) ので、どの方法間に差があるのかをLSD法を用いた多重比較をおこなったところ「1,2,4<3」, 「1,2<5」の関係で有意な差のあることがわかった。

(3) 運動有能感得点下位群におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

男子、個人的種目の下位群では、表10に示されるようにグルーピング方法の期待度得点への有意な影響がみられなかった ($F(2.430, 70.476) = 1.562, p = .213 > .05$).

- 「1 グループとリーダーを教師が決める」
- 「2 リーダーを教師が選び、リーダーが話し合ってグループを決める」
- 「3 教師がグループ分けをして、そのグループでリーダーを決める」
- 「4 リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合ってグループを決める」
- 「5 グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める」

1-2 男子、個人的種目における学習者の特性とグルーピング方法の関係

男子、個人的種目では中位群においてグルーピング方法が期待度得点の違いに有意な影響のあることが明らかになったが、上位群と下位群ではグルーピング方法が期待度得点の違いに影響しないことが明らかになった。

① 上位群の結果について

上位群の結果は、運動に関する自信から、どのようにグルーピングがおこなわれても構わない、どのグループに所属しても構わない、また、「表2 グループ

ング方法の特徴と編成時の留意事項」に示したようにみんなの前で上手い子、下手な子などの評価が行われても構わないという意識、つまり運動に関する自信を担保とした意識のあらわれによるものであると考えられる。

② 下位群の結果について

逆に下位群では有意な効果がみられなかったが、「2リーダーを教師が選び、リーダーが話し合っってグループを決める」、「4リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合っってグループを決める」の得点が低く、「1グループとリーダーを教師が決める」というグルーピング方法の得点が「3教師がグループ分けをして、そのグループでリーダーを決める」や「5グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める」に近い値を示した。これは上位群の学習者とは逆に学習仲間であるリーダーに自分がどのように評価されるのかという不安のあらわれであり、運動に関する自信のなさによる結果であると思われる。また、指導者にグループ編成のすべてを任すという「1グループとリーダーを教師が決める」の方法の得点が高い傾向を示したことについても、学習仲間に関心があることへの不安など、グルーピングに起因する諸問題の解決を指導者に任せたいという意識のあらわれであり、運動に関する自信のなさによる結果であると考えられる。

③ 中位群の結果について

中位群の結果は、先の運動に関する自信をもっていることからグルーピング方法にこだわらない上位群の学習者と、運動に関する自信のなさから指導者にグルーピングを依存したい下位群の学習者との中間的な意識から、グルーピングにこだわりを持ち、そのこだわりを指導者やリーダーに任すのではなく、グルーピングに直接関わりその結果に納得したいという思いによるものであると推察できる。

以上から個人的種目の授業における中位群の学習者は、指導者や指導者の選んだリーダーによるグルーピングよりも、学習者や学習者が選んだリーダーによるグルーピングを期待していると考えられる。

1-3 男子、個人的種目の授業における学習者の特性に応じたグルーピング方法の検討

本研究の目的は学習者の特性と学習者の採用を期待するグルーピング方法の関係を明らかにし、学習者の特性に適したグルーピング方法のあり方を求めることである。しかし、実際の授業場面では、上位群、中位群、下位群を分けずにグルーピングがおこなわれていることから、男子個人的種目の授業では、中位群の学習者がその採用を期待していた「3教師がグループ分けをして、そのグループでリーダーを決める」や「5グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める」という方法が適したグルーピング方法であると考えられる。その際、グルーピング方法を問題としていない上位群の学習者がいること、グルーピングを指導者に委ねたい下位群の学習者の存在に十分留意する必要があるといえる。

表10 男子、個人的種目の運動有能感得点群別、グルーピング方法別期待度得点の1要因分散分析結果と多重比較結果

男子 個人的 種目	グルーピング方法番号 (表9参照)					1 要因 分散分析 F 値	多重比較 LSD p<.05
	1 平均点SD	2 平均点SD	3 平均点SD	4 平均点SD	5 平均点SD		
上位群	2.969	2.781	3.063	2.969	2.938	0.398 n.s.	
	1.150	0.941	1.134	0.967	0.982		
n = 32							
中位群	2.513	2.513	3.128	2.513	2.923	4.887 ***	1.2<3 1.2<5
	0.790	0.885	0.656	0.885	0.929		
n = 39							
下位群	2.633	2.467	2.767	2.433	2.800	1.562 n.s.	
	0.850	0.730	0.898	0.728	0.847		
n = 30							

*** : p<.001

2-1 男子、集団的種目におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

男子、集団的種目における学習者の特性とグループ決定方法の関係を明らかにするために、運動有能感得点群（上・中・下位群）別にグルーピング方法の違いが期待度得点に与える影響について分散分析をおこなった。その結果は以下のものであり、上位、中位、下位群の全てにおいてグルーピング方法の違いは期待度得点への影響に有意な効果のないことがわかった（表11）。

(4) 上位群 ($F(2.894, 89.718) = .389, p = .754 > .05$)

(5) 中位群 ($F(3.105, 117.985) = .825, p = .486 > .05$)

(6) 下位群 ($F(2.684, 77.835) = 1.736, p = .172 > .05$)

2-2 男子、集団的種目における学習者の特性とグルーピング方法の関係

男子、集団的種目における運動有能感得点による学習者の特性とグルーピング方法の関係は表11に示したように関係のないことが明らかになった。このような結果について集団対集団の競い合いや仲間と力を合わせて競争を楽しむという集団的種目の特性から考えることができる。つまり集団的種目の競争を楽しむためには、競争の平等性、競争の前提条件となる運動技能の問題や仲間と力を合わせることに必要となる人間関係の問題に関する平等性を保障するグルーピングが求められる。

このような集団的種目の特性とグルーピング方法の複雑さの関係から、自分たちだけで決めたいという学習者主導のグルーピング方法だけでなく、その対極である指導者主導のグルーピング方法の採用を期待するなど、グルーピング方法に対する期待度が分散したものと推察できる。

また、表6に示したように集団的種目におけるグループやチームの成績（勝敗）は、個人技能の優劣を再構成したもので、その構成員全員に共通のものとなる。このような個人技能とグループやチームの成績の関係から、個人能力の低い学習者には、自分がどこに所属するかの問題より、グループやチームに迷惑をかけないか、同じグループやチームのメンバーからどのように評価されるであろうか、が問題になると思われる。低位群において表11の「2」や「4」のリーダーがグループを決める方法が低得点の傾向を示したことは、このよう

な学習仲間の自分への評価を気にしているということのあらわれであると思われる。

2-3 男子集団的種目の授業における学習者の特性に応じたグルーピング方法の検討

以上から男子、集団的種目では、有能感得点による学習者の特性に関係なく、集団的種目の特徴を十分に配慮したグルーピング方法が必要であると考えられる。また、運動有能感低位群の学習者は他者の自分への評価を気にしているという傾向から、運動有能感の低い学習者の多い授業ではリーダーだけによるグルーピング方法の採用を避けるべきであると推察できる。

- 「1」 グループとリーダーを教師が決める
- 「2」 リーダーを教師が選び、リーダーが話し合っグループを決める
- 「3」 教師がグループ分けをして、そのグループでリーダーを決める
- 「4」 リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合っグループを決める
- 「5」 グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める

表11 男子、集団的種目の運動有能感得点群別、グルーピング方法別期待得点の1要因分散分析結果と多重比較結果

男子 個人的 種目	グルーピング方法番号 (表9参照)					1 要因 分散分析 F 値	多重比較 LSD p<.05
	1 平均点SD	2 平均点SD	3 平均点SD	4 平均点SD	5 平均点SD		
上位群	3.031 0.999	2.844 0.920	3.094 0.963	2.938 1.134	3.031 0.933	.389 n.s.	
	n = 32						
中位群	2.692 0.922	2.718 0.869	2.949 0.759	2.769 0.902	2.641 0.903	.825 n.s.	
	n = 39						
下位群	2.433 0.898	2.333 0.711	2.700 0.915	2.600 0.770	2.800 0.761	1.736 n.s.	
	n = 30						

3-1 女子、個人的種目におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

(7) 運動有能感得点上位群におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

女子個人的種目の上位群では、表12に示されるようにグルーピング方法が期待度得点に有意な影響を与えることが明らかになった ($F(2.749,112.729) = 6.121, p = .001 < .05$)。そのためどのグルーピング方法間に差があるのかを明らかにするためにLSD法を用いた多重比較を行った結果、「1, 2<3」の関係で有意な差のあることがわかった。

(8) 運動有能感得点中位群におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

女子個人的種目の中位群では、表12に示されるようにグルーピング方法による期待度得点への影響には有意な効果がみられた ($F(4.000,164.000) = 12.692, p = .001 < .05$)。次にどのグルーピング方法間に差があるのかを明らかにするためにLSD法を用いた多重比較を行った結果、「1, 2, 4<3, 5」の関係で有意な差のあることがわかった。

(9) 運動有能感得点下位群におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

女子個人的種目の下位群では、表12に示されるようにグルーピング方法が期待度得点に有意な影響を与えることが明らかになった ($F(3.210,118.767) = 4.222, p = .003 < .05$)。そのためどのグルーピング方法間に差があるのかを明らかにするためにLSD法を用いた多重比較を行った結果、「4<3, 5」の関係で有意な差のあることがわかった。

- 「1」 グループとリーダーを教師が決める
- 「2」 リーダーを教師が選び、リーダーが話し合っグループを決める
- 「3」 教師がグループ分けをして、そのグループでリーダーを決める
- 「4」 リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合っグループを決める
- 「5」 グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める

3-2 女子、個人的種目における学習者の特性とグルーピング方法の関係

女子、個人的種目では上位、中位、下位群の全てにおいてグルーピング方法が期待度得点の違いに有意な影響のあることが明らかになり、各群における多重比較の結果、上位群では「1, 2 < 3」、中位群では「1, 2, 4 < 3, 5」、下位群では「4 < 3, 5」の関係でグルーピング方法の期待度得点間に有意な差のあることがわかった。

① 上位群の結果について

上位群の結果は、「1」、「2」と「3」のリーダー決定方法の違いによるものであると考えられる。表3に示したように「1」、「2」の方法では指導者がリーダーを選び、「3」の方法では学習者が選ぶところに違いが見られる。運動に関する自信を持っている上位群の学習者はリーダーに選出される可能性が高く、リーダー決定の当事者として自分の所属グループやそれを誰が決定するのかより、リーダー選出への関心が高いと推察され、そのことが要因となってリーダーを自分たちで決める「3」の方法の期待度が高くなったものと考えられる。また、中位群、下位群では「5」の方法への期待度が「1」、「2」の期待度を有意に上まわっていたが、上位群ではみられなかった。この結果も上位群におけるリーダー選出への関心の高さによるものであると考えられる。

② 中位群の結果について

中位群の結果は、上位群に見られたリーダー決定方法の影響に加えて、グループを誰が決定するのかにこだわった結果であると考えられる。グループが指導者に選ばれたリーダーによって決定される「2」の方法と自分たちで選出したリーダーによって決定される「4」の方法は期待度の低い結果となった。上位群では、自分がリーダーに選出されるかどうかの観点からリーダーの選出に関心が高まっていたが、自分の能力に自信のない中位群や後述の下位群では、自分の低い能力を他人に評価されたくないというこだわりから、誰がグループを決定するのが要因となり、指導者や自分たちによるグルーピング方法への期待度が高くなり、リーダーによるグルーピング方法の期待度が有意に

低い結果になったものと考えられる。

③ 下位群の結果について

下位群では「4リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合っグループを決める」という方法が「3」と「5」の方法に較べて有意に低い期待度を示した。これは、自分たちによって選出されたリーダーに自分がどのように評価されるのかという不安、また、表2の留意事項に「みんなの前でリーダーによるグループ編成は避けるべきであり、教師の指導のもとに編成を行わせるべきである」と示されているように、みんなの前で自分の能力がさらされるという不安のあらわれであると考えることができ、運動に関する自信のなさから引き起こされた結果であると思われる。

また、下位群では上位群や中位群でみられた「1」、「2」のグルーピングを指導者に依存した方法と「3」、「5」の方法に有意な差がみられないという結果になった。表12によると「1」のグループとリーダーを教師が決める方法の得点が上位群と同じ値を示し、中位群より高い値となった。このことは下位群では中位群以上に運動に関する自信のなさから、学習仲間自分が評価されることへの不安など、グルーピングに起因する諸問題の解決を指導者に任せたいという気持ちのあらわれであろうと推察できる。このように下位群の結果は、だれが自分のグループを決めるのかということを要因としたグルーピング方法への期待度によるものであると考えられる。

3-3 女子個人的種目の授業における学習者の特性に応じたグルーピング方法の検討

以上、女子、個人的種目における運動有能感得点の高低による学習者の特性とグルーピング方法の関係から、有能感得点上位群に対しては、リーダーの決定方法に配慮すること、中位群ではグループの決定者に配慮すること、下位群では、中位群と同様にだれがグループを決定するのか、さらにリーダーによるみんなの前でのグルーピングを避けることと、グルーピングの全てを指導者に頼りたいという学習者の存在することへの配慮が必要であるといえる。

実際の授業ではこれらの上位，中位，下位群の学習者が混在していることから，女子，個人的種目の授業では，下位群の結果を尊重し，「3教師がグループ分けをして，そのグループでリーダーを決める」や「5グループをクラス全員で決め，そのグループでリーダーを決める」方法の採用を優先し，リーダーによるみんなの前でのグルーピングを避けること，グルーピングの全てを指導者に頼りたいという学習者の存在することへの配慮が必要であると考えられる。

表12 女子，個人的種目の運動有能感得点群別，グルーピング方法別期待得点の1要因分散分析結果と多重比較結果

女子 個人的 種目	グルーピング方法番号 (表9参照)					1 要因 分散分析 F 値	多重比較 LSD p<.05
	1 平均点SD	2 平均点SD	3 平均点SD	4 平均点SD	5 平均点SD		
上位群	2.500 0.862	2.357 0.909	3.048 0.789	2.571 0.935	2.905 0.943	6.121 ***	1,2<3
	n = 42						
中位群	2.452 0.772	2.190 0.740	3.071 0.778	2.357 0.759	3.071 0.745	12.692 ***	1,2,4<3,5
	n = 42						
下位群	2.500 0.707	2.342 0.791	2.842 0.661	2.211 0.966	2.763 0.821	4.222 **	4<3,5
	n = 38						

*** : p<.001 ** : p<.01

4-1 女子，集団的種目におけるグルーピング方法別期待得点の比較

(10) 運動有能感得点上位群におけるグルーピング方法別期待得点の比較

女子集団的種目の上位群では，表13に示されるようにグルーピング方法が期待得点に有意に影響することが明らかになった ($F(2.8222, 115.696) = 13.234$, $p = .000 < .05$)。次にどのグルーピング方法間に差があるのかを明らかにするためにLSD法を用いた多重比較を行った。その結果，「1<3,5」，「2,<3,4,5」の関係で有意な差のあることがわかった。

(11) 運動有能感得点中位群におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

女子集団的種目の中位群では、表13に示されるようにグルーピング方法が期待度得点に与える影響には有意な効果がみられた ($F(4.000, 164.000)=16.626$, $p=.000<.05$)。次にどのグルーピング方法間に差があるのかを明らかにするためにLSD法を用いた多重比較を行った。その結果、「1, 2<3, 5」, 「4<5」の関係で有意な差のあることがわかった。

(12) 運動有能感得点下位群におけるグルーピング方法別期待度得点の比較

女子集団的種目の下位群では、表13に示されるようにグルーピング方法の期待度得点への影響には有意な効果がみられた ($F(2.740, 101.369)=4.704$, $p=.005<.05$)。そのためどのグルーピング方法間に差があるのかを明らかにするためにLSD法を用いた多重比較を行った。その結果、「2, 4<5」の関係で有意な差のあることがわかった。

- 「1」 グループとリーダーを教師が決める
- 「2」 リーダーを教師が選び、リーダーが話し合っグループを決める
- 「3」 教師がグループ分けをして、そのグループでリーダーを決める
- 「4」 リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合っグループを決める
- 「5」 グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める

4-2 女子、集団的種目における学習者の特性とグルーピング方法の関係

女子、集団的種目では上位、中位、下位群の全てにおいてグルーピング方法が期待度得点の違いに有意な影響のあることが明らかになり、各群における多重比較の結果、上位群では「1<3, 5」, 「2<3, 4, 5」, 中位群では「1, 2<3, 5」, 「4<5」, 下位群では「2, 4<5」の関係でグルーピング方法の期待度得点間に有意な差のあることがわかった。

① 上位群の結果について

上位群の結果は、表3を参考にグルーピングを行うのは誰か、リーダーを決めるのは誰かに関する指導者と学習者の主導性の関係から考えることができる。つまり「1」と「2」はグループとリーダーの決定に指導者が主導性を発揮する方法に対して、「3」、「4」、「5」は学習者がグループやリーダーの決定に主導性を発揮する方法であり、グルーピング時の主導性のあり方に違いがみられる。集团的種目の学習ではグループの固定期間が長いこと、学習内容や方法をグループ単位で考えることから、グループ内の人間関係が学習活動に影響すると考えられる。上位群の学習者はこのような集团的種目の学習の進め方において中心的な役割を果たすことが多く、グループ内の人間関係を良好に保つ方法として指導者による方法より、人間関係の当事者でありその関係を良く知る自分たちによる方法を期待したものと考えられる。

また、上位群では「4リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合っ
てグループを決める」の方法への期待度が「2」の方法に較べて高い値を示した。この結果は、上位群の学習者はグループのリーダーに選出される可能性が高く、リーダーの選出方法にも関心を持ち、グルーピングと同様にリーダーの決定についても自分たちで決定したいという期待によるものであると考えられる。加えて、中位群や下位群の学習者はみんなの前でリーダーによってグルーピングが行われることへの不安から「4」の方法に対して低い期待度得点を示したが、運動に自信のある上位群の学習者は、みんなの前で自分の能力が評価されることへの不安がないことから、このような結果になったと考えられる。

② 中位群の結果について

中位群の結果は上位群と類似した結果であることから、同様にグルーピング時における指導者と学習者の主導性の関係から考えることができる。しかし「4」の方法については逆の結果を示している。このことは運動に関する自信の違いによるものであると考えられる。

③ 下位群の結果について

下位群では、「1グループとリーダーを教師が決める」の方法と「3」や「5」の方法の間に有意な差が見られなかった。この結果は女子個人的種目と同様にグルーピングに起因する諸問題の解決を指導者に任せたいという気持ちのあらわれであると考えた。

また、「2」や「4」の方法が「5」の方法に較べて有意に低い期待度得点を示した。この結果は、女子個人的種目と同様に下位群では運動に関する自信のなさから、特定のリーダーに自分が評価されるグルーピング方法の採用を避けてもらいたいという気持ちのあらわれによるものであると考えられる。

このように下位群の結果は、だれが自分のグループを決めるのかということを変因として、グルーピング方法への期待度が決定されたことによると考えられる。

4-3 女子集団的種目の授業における学習者の特性に応じたグルーピング方法の検討

以上、女子、集団的種目における運動有能感得点の高低による学習者の特性とグルーピング方法の関係から、有能感得点上位群では、グルーピングに関わる主導性を学習者に委ねる方法を採用すること、特にリーダーの決定方法に配慮すること、中位群では上位群と同様にグルーピングの主導性は学習者に委ねる方法を採用すること、しかし、リーダーによるグルーピングを避けること、下位群では中位群と同様にだれがグループを決定するのか、さらにリーダーによるみんなの前でのグルーピングを避けることと、グルーピングの全てを指導者に頼りたいという学習者の存在することへの配慮が必要であるといえる。

実際の授業ではこれらの上位、中位、下位群の学習者が混在していることから、女子、集団的種目の授業では、下位群の結果を基に、「5グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める」方法の採用を優先し、リーダーによるみんなの前でのグルーピングを避けること、グルーピングの全てを指導者に頼りたいという学習者の存在することへの配慮が必要であると考えられる。

表13 女子、集团的種目の運動有能感得点群別、グルーピング方法別期待度得点の
1要因分散分析結果と多重比較結果

女子 集团的 種目	グルーピング方法番号 (表9参照)					1 要因 分散分析 F 値	多重比較 LSD p<.05
	1 平均点SD	2 平均点SD	3 平均点SD	4 平均点SD	5 平均点SD		
上位群	2.167 0.824	2.071 0.778	2.905 0.617	2.786 0.842	3.048 0.825	13.234 ***	1<3,5 2<3,4,5
	n = 42						
中位群	2.143 0.814	2.119 0.705	2.857 0.751	2.452 0.772	3.190 0.740	16.626 ***	1,2<3,5 4<5
	n = 42						
下位群	2.263 0.828	2.105 0.863	2.605 0.755	2.316 0.999	2.868 1.018	4.704 **	2,4<5
	n = 38						

*** : p<.001 ** : p<.01

V まとめ

本研究は、学習者の特性に応じたグルーピング方法を明らかにするためにおこなわれた。運動有能感の高低が学習者の特性とされたことから、運動有能感得点を求めるアンケートと個人的、集团的種目別にグルーピング時に採用を期待するグルーピング方法を問うアンケートが大学2回生238名を対象に実施された。アンケート結果から対象学生を男女別、運動有能感得点別に上位群、中位群、下位群に分け、学習者の特性群別にグルーピング方法を変数、期待度得点を従属変数として被験者内計画による分散分析がおこなわれた。さらにグルーピング方法の期待度得点への影響が有意に認められた場合には、どのグルーピング方法間に差があるのかを調べるためにLSD法を用いた多重比較が実施された。その結果、学習者の特性に応じたグルーピング方法について以下の諸点が明らかになった。

1 男子、個人的種目における学習者の特性に応じたグルーピング方法

男子、個人的種目では、中位群でグルーピング方法の期待度得点への影響に

有意な効果がみられ ($F(4.000, 152.000)=4.887, p=.001<.05$), 多重比較の結果「1, 2, 4 < 3」, 「1, 2 < 5」の関係で有意な差があったが, 上位群 ($F(2.763, 85.645)=.398, p=.739>.05$) と下位群 ($F(2.430, 70.476)=1.562, p=.213>.05$) には, グルーピング方法の期待度得点への有意な影響がみられなかった。

以上から個人的種目において, 中位群の学習者は指導者や指導者の選んだリーダーによるグルーピング方法より, 学習者や学習者が選んだリーダーによるグルーピング方法の採用を期待していることが明らかになったが, 上位群や下位群の学習者では特に期待するグルーピング方法のないことが明らかになった。

このことから男子個人的種目の授業では, 中位群の学習者がその採用を期待していた「3教師がグループ分けをして, そのグループでリーダーを決める」や「5グループをクラス全員で決め, そのグループでリーダーを決める」という方法が適したグルーピング方法であると考えられる。

しかし, 実際の授業場面では, 上位群, 中位群, 下位群を分けずにグルーピングがおこなわれていることから, グルーピング方法を問題としていない上位群の学習者がいること, グルーピングを指導者に委ねたい下位群の学習者の存在に十分留意する必要があるといえる。

2 男子, 集団的種目における学習者の特性に応じたグルーピング方法

男子, 集団的種目では上位群 ($F(2.894, 89.718)=.389, p=.754>.05$), 中位群 ($F(3.105, 117.985)=.825, p=.486>.05$), 下位群 ($F(2.684, 77.835)=1.736, p=.172>.05$) の全てにおいてグルーピング方法の期待度得点への影響に有意な効果がみられなかった。

上記のような結果は, 集団的種目ではグループやチームの成績(勝敗)が個人技能の優劣が再構成され, その構成員全員に共通のものとなるなど, 集団的種目の特性からグルーピング時の配慮事項が複雑であるため, 自分たちだけで決めたいという学習者主導のグルーピング方法だけでなく, その対極である指導者主導のグルーピング方法の採用を期待するなど, グルーピング方法に対する期待度が分散したものと考えられる。

以上から男子, 集団的種目では, 有能感得点による学習者の特性に関係なく,

集団的種目の特徴を十分に配慮したグルーピング方法が必要であると考えられる。また、運動有能感低位群の学習者は他者の自分への評価を気にしているという傾向から、運動有能感の低い学習者の多い授業ではリーダーだけによるグルーピング方法の採用を避けるべきであるといえる。

3 女子、個人的種目における学習者の特性に応じたグルーピング方法

女子、個人的種目では、上位群、中位群、下位群全ての特性群で以下に示すグルーピング方法の期待度得点に対する有意な影響と多重比較の結果が得られた。

- (1) 上位群 (F(2.749, 112.729)=6.121, p=.001<.05) 「1, 2<3」
- (2) 中位群 (F(4.000, 164.000)=12.692, p=.001<.05) 「1, 2, 4<3, 5」
- (3) 下位群 (F(3.210, 118.767)=4.222, p=.003<.05) 「4<3, 5」

以上の女子、個人的種目における運動有能感得点の高低による学習者の特性とグルーピング方法の関係から、上位群に対しては、リーダーの決定方法に配慮すること、中位群ではグループの決定者に配慮すること、下位群では、中位群と同様にだれがグループを決定するのか、さらにリーダーによるみんなの前でのグルーピングを避けることとグルーピングの全てを指導者に頼りたいという学習者の存在することへの配慮が必要であることが明らかになった。

しかし、実際の授業場面では、上位群、中位群、下位群を分けずにグルーピングがおこなわれていることから、中位群や下位群の学習者への配慮事項を優先したグルーピングが行われる必要があるといえる。

4 女子、集団的種目における学習者の特性に応じたグルーピング方法

女子、集団的種目では、上位群、中位群、下位群全ての特性群で以下に示すグルーピング方法の期待度得点に対する有意な影響と多重比較の結果が得られた。

- (1) 上位群 (F(2.8222, 115.696)=13.234, p=.000<.05) 「1<3, 5」 「2,<3, 4, 5」
- (2) 中位群 (F(4.000, 164.000)=16.626, p=.000<.05) 「1, 2<3, 5」 「4<5」
- (3) 下位群 (F(2.740, 101.369)=4.704, p=.005<.05) 「2, 4<5」

- 「1」 グループとリーダーを教師が決める
- 「2」 リーダーを教師が選び、リーダーが話し合っグループを決める
- 「3」 教師がグループ分けをして、そのグループでリーダーを決める
- 「4」 リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合っグループを決める
- 「5」 グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める

以上の女子、集団的種目における運動有能感得点の高低による学習者の特性とグルーピング方法の関係から、上位群では、グルーピングに関わる主導性を学習者に委ねる方法を採用すること、特にリーダーの決定方法に配慮すること、中位群では上位群と同様にグルーピングの主導性は学習者に委ねる方法を採用すること、しかし、リーダーによるグルーピングを避けること、下位群では中位群と同様にだれがグループを決定するのか、さらにリーダーによるみんなの前でのグルーピングを避けることとグルーピングの全てを指導者に頼りたいという学習者の存在することへの配慮が必要であることが明らかになった。

実際の授業ではこれらの上位群、中位群、下位群の学習者が混在していることから、女子、集団的種目の授業では、下位群の結果を基に、「5グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める」方法の採用を優先し、リーダーによるみんなの前でのグルーピングを避けること、グルーピングの全てを指導者に頼りたいという学習者の存在することへの配慮が必要であると考えられる。

このように学習者の特性に応じたグルーピング方法の諸点が明らかになったが、表10～13から、グルーピング方法と期待度得点の関係に男女差が見られた。つまり男子では、運動有能感得点を学習者の特性とした場合、集団的種目の中位群にグルーピング方法の期待度得点への有意な影響がみられただけで、他の学習者においては、有意な関係が見られなかった。しかし、女子においては個人的種目と集団的種目において全ての特性群において有意な影響がみられた。

本来ならばこの男女差についてさらに分析と考察を加えるべきであるが、それらは今後の研究としてとりあげ、ここでは以下のように男女の性格特性とPM理論から概略的な考察にとどめた。

男女の性格特性の中核として一般に男性は作動性（自己成長や達成）、女性は協同性（他者との協調や親密さ）が強いとされている³¹⁾。またPM理論によると集団機能は集団の課題解決ないし目標達成に志向した機能と集団の自己保存なし維持機能の2つの機能次元に大別されている³²⁾。体育授業で組織されるグループやチームもPM理論の対象となる集団であることから2つの機能次元を考えることができる。このような男女の性格特性やPM理論から、表10～13に見られる男女差は、女性ではグループやチームの成績より、そこでの人間関係の維持に重きが置かることからグルーピング方法に関心が高く、表12、13のようにグルーピング方法と期待度得点に有意な関係がみられたと考えられる。

VI 今後の課題

学習者の特性に応じたグルーピング方法について学習者の特性を運動有能感得点の高低に求めた。運動有能感は①有能さの認知と②統制感、③受容感の3因子から構成されていることが明らかにされている。今回の研究ではこの3因子をまとめ3群の特性群とし、それぞれの群に応じたグルーピング方法を検討した。しかし、この3因子の中でも学習仲間からどのように認識されているか、また受け入れられているかに関する自信である受容感因子の期待度への影響が大きいものと推察されることから、今後は先に課題としたグルーピング方法への期待における男女差とこの受容感の高低からみたグルーピング方法に関する研究を今後の課題としたい。

注1 運動有能感とは

運動有能感は、運動に対する動機が満足される、特に内発的動機づけが満足されると運動が好きという快の情動が生じるとともに形成されるといわれている³³⁾。生涯スポーツを目指すためには運動好きを育て、内発的動機づけを満足させる授業が求められるが、その授業は運動有能感の高める授業であると言い換えることができる。

運動有能感は岡澤らによって「自分は運動を上手にできる」という自信である「身体的有能さの認知」、「努力や練習をすればできるようになる」という自

信である「統制感」、さらに「教師や学習仲間から受け入れられている」という自信である「受容感」の3因子から構成されていることが明らかにされている³⁴⁾。

このように運動有能感は「身体的有能さの認知」のみが重要視される従来の「有能感」という考え方ではなく、「身体的有能さの認知」に加えて、運動結果ではなく運動をコントロールできるだろうという自信や自分と他者との関係を含めたものであることから、運動有能感によって学習者の特性を総合的に捉えることができると考えた。

資料1 運動有能感を問うアンケート

〈1〉

1 あなたの性別をお答えください。 男——1 女——2

〈2〉運動に対する自信に関するアンケートです。2～13は運動に関する文章です。それぞれについて、自分にあてはまると思う番号を、これまで経験してきた体育授業を総合して、次の1～5より選びお答えください。

5 よくあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない
2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	

- 2 運動能力がすぐれていると思います。…………… ()
- 3 たいていの運動は上手にできます。…………… ()
- 4 練習をすれば必ず技術や記録は伸びると思います。…………… ()
- 5 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います。…………… ()
- 6 運動をしているとき、先生が励ましたり応援してくれます。…………… ()
- 7 運動をしているとき、友達が励ましたり応援してくれます。…………… ()
- 8 一緒に運動をしようと誘ってくれる友達がいます。…………… ()
- 9 運動の上手な見本として、よく選ばれます。…………… ()
- 10 一緒に運動する友達がいます。…………… ()
- 11 運動について自信を持っているほうです。…………… ()

- 12 少しむずかしい運動でも、努力すればできると思います。…… ()
- 13 できない運動でも、あきらめないで練習すれば、できるようになると思います。…………… ()

資料2 学習者の期待するグリーピング方法を問うアンケート

〈3〉あなたの受ける授業で、今からグループ分けがおこなわれます。

どのようなグループ分けを希望しますか。

Aの授業とBの授業に分けて教えてください。

自分の希望する程度を次の1～4より選び、

Aの授業は14～18に、Bの授業は21～25に、答えください。

Aの授業	①種目———器械運動や陸上競技などの個人種目。 ②競争の楽しみ方——個人記録による競争をおこなう。 ③練習の仕方——グループで協力して個人記録の向上を目指し練習する。
Bの授業	①種目———球技などの団体種目やリレーなど。 ②競争の楽しみ方——チーム間で競争をおこなう。 ③練習の仕方——チームで協力してチーム力の向上を目指して練習する。

4 ぜひ、そうしてほしい	3 そうしてほしい
2 そうしてほしくない	1 ぜひ、やめてほしい

- 14・21 グループとリーダーを教師が決める…………… ()
- 15・22 リーダーを教師が選び、リーダーが話し合ってグループを決める…………… ()
- 16・23 教師がグループ分けをして、そのグループでリーダーを決める…………… ()
- 17・24 リーダーをクラス全員で決め、リーダーが話し合ってグループを決める…………… ()
- 18・25 グループをクラス全員で決め、そのグループでリーダーを決める…………… ()

引用・参考文献

- 1) Dniel W. Midura, Donald R. Glover 著 高橋健夫監訳「訳者まえがき」
チャレンジ運動による仲間づくり 大修館書店 2000 pp.v-vi
- 2) 高橋健夫「新学習指導学習指導要領に即した授業の課題」体育科教育 大
修館書店 2000 48(15)pp.60-63
- 3) 前掲書2同書
- 4) 小谷川元一 人間関係を培う体育の授業づくり 高橋健夫・岡出美則・友
添秀則・岩田靖編著 新版体教育学入門 大修館書店 2010 pp.227-234
- 5) 文部科学省小学校学習指導要領体育編 東洋館出版 2008 p.3
- 6) 友添秀則 学習集団をめぐる論議過程 竹田清彦ほか編 体育科教育学の
探求 大修館書店 1997 pp.284-300
- 7) 友添秀則 体育の学習形態論 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編
著 体育科教育学入門 大修館書店 2002 pp.89-97
- 8) 時本識次 学習集団 キーワード保健体育科教育 不昧堂出版 1996
pp.156-157
- 9) 高島稔 体育の学習形態 体育科教育法講義 大修館書店 1992 pp.
66-77
- 10) 高島稔 体育の学習形態 宇土正彦編集 体育科教育法入門 大修館書店
1983 pp.76-87
- 11) 出原泰明著 体育の授業方法論 大修館書店 1991 pp.112-119,177-202
- 12) 児島邦宏 集団と個の指導スキル 東洋・中島章夫監修 授業技術講座3
教師の実践的能力と授業技術 ぎょうせい 1988 pp.92-111
- 13) 岡出美則 (2002)「体育の授業づくりの構造」高橋健夫・岡出美則・友添秀
則・岩田靖編著 体育科教育学入門 大修館書店 pp.132-139
- 14) 元塚敏彦「体育授業におけるグルーピング方法に関する研究」皇學館大学
教育学部研究報告集第2号 平成22年 pp.169-206
- 15) 元塚敏彦「小学校体育授業におけるグルーピング方法に関する研究 (2)」
皇學館大学紀要 第49輯 平成23年 pp.222-242
- 16) 元塚敏彦 小学校体育授業におけるグルーピング方法に関する研究 (3)

- 皇学館大学紀要第50輯 平成24年 pp.82-105
- 17) 岡澤祥訓・高橋健夫 体育の立場からみた子ども 宇土正彦・高島稔・永島博正・高橋健夫編著 体育科教育法講義 大修館書店 1992 pp.18-24
 - 18) 三木ひろみ 学習主体について知る 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著 体育科教育入門 大修館書店 2002 pp.30-38
 - 19) 高橋健夫 学習者と体育 宇土正彦編著 体育科教育入門 大修館書店 1983 p.21-27
 - 20) 高橋健夫編著 体育授業を観察評価する 明和出版 2003 p.165
 - 21) 岡澤祥訓・北真佐美・諏訪裕一郎 運動有能感の構造とその発達傾向及び性差に関する研究 スポーツ教育学研究 16(2) pp.145-155
 - 22) 前掲書14同書
 - 23) 大橋美勝 体育の学習指導過程 体育科教育法入門 大修館書店 1983 pp.95-97
 - 24) D. Siedentop (高橋健夫監訳) 新しい体育授業の想像 大修館書店 2003 pp.42-43
 - 25) 前掲書23同書
 - 26) 前掲書24同書
 - 27) 前掲書16同書
 - 28) 文部省 中学校学習指導要領 大蔵省印刷局 1977 pp.73-80
 - 29) 文部科学省 小学校学習指導要領解説体育編 東洋館出版 2008 pp.13-17
 - 30) 前掲書16同書
 - 31) 大場ゆかり スポーツと男性性・女性性 日本スポーツ心理学会編 スポーツ心理学辞典 大修館書店 2008 pp.344-345
 - 32) 三隅ニ不ニ リーダーシップ行動の科学 有斐閣 1978 p.61
 - 33) 杉原隆 新版運動指導の心理学 大修館書店 2003 p.153
 - 34) 前掲書21同書